

エヌ・イ・ノヴィコフの市民教育論

佐々木 弘 明

The thought about civic education of N. I. Novikov

Hiroaki SASAKI

ロシアで市^{グラジニダノストツオ}民という語が使われるようになるのは17世紀後半のことである。この時代を代表する知識人エス・ポロツキー（1629～1680）は、理性的にかつ誠実に「この世で市民となる」能力を植えつけることを説いたが¹⁾、この「市民となる」ということは、自己の利害を捨てて、祖国と君主に奉仕する臣民^{ボダノツイエ}となることを意味した。この考え方がピョートル一世（=大帝 在位1687～1725）の時代にそのまま持ち込まれていった。ピョートルは、ロシアの後進性の克服のために、君主も含め国民すべてが国家の奉仕者となり、「国家的利益」「全体的福祉」をすべてに優先させることを求め、貴族階層に国家勤務、農民階層に納税、等を義務づけ、自らその先頭に立った。ロシアの知識人たちは、ピョートルを君主のモデルとして「国家的利益」「全体的福祉」に奉仕する臣民=市民となることを呼びかけ、奉仕を怠り私的利益に奔走する貴族階層を批判した。諷刺作家ア・カンテミール（1708～1744）は、「貴族のアダムは生れなかった」のであり、古代ではみな「普通の農民」にすぎなかった²⁾として、諷刺詩の中で貴族階層の浅薄な知識、私利私欲、尊大、傲慢、頹廢的生活を非難し、彼らに「人間—市民」として自覚し「社会活動家」となる³⁾ことを求めた。ここでも市民は、個人的利害ではなく社会的利害に立ち、祖国に奉仕する人間である。このような考え方は、上から下まですべての国民が国家の奉仕者であって、各人各階層が市民—臣民としてその役割分担をそれなりに遂行することに国家の繁栄と安定の基礎があるとする合理主義的世界観に立っている。市民は「愛国者」や「祖国の息子」^{チェストツア}とも同じ意味であった。従って奉仕者としての自覚を欠き、責務を回避する貴族がつねに批判の対象となった。

しかし、1762年にピョートル三世（在位1762.1～6）によって「貴族の自由に関する布告」が公布され、貴族階層が国家への奉仕義務から解放された。ここにおいて市民—奉仕者としての臣民—が二つの意味を持つようになっていく。すなわち、国家にたいして忠良

なる臣民としての市民と自由な人間としての市民である。いまや徒食者となった貴族階層は、奉仕を怠る者としての批判の対象ではなく、農奴を非人道的に処する虐待者としての批判の対象となった。

夫ピョートル三世に代って即位したエカテリーナ二世（在位1762～1796）は、啓蒙君主として治世の最初の10年間自由主義者を装い、フランスの啓蒙思想家たちとのいわゆる火遊びの時代に、ロシアの貴族を中心にロック、ルソー、百科全書—ディドロ、ダランペール、ヴォルテール、エルヴェシウス、グリム、バセドー、等の著作が読まれ、これらはロシア人に「思考することを教え」た⁴⁾。とりわけヴォルテールが好んで読まれ、ヴォルテール主義者といわれる人々が形成された。エカテリーナ自身もヨーロッパの啓蒙思想家の著作に親しみ、ヴォルテール、ディドロ、グリムと文通を重ねた⁵⁾。

エカテリーナは、ロシアの貴族や僧侶をはじめとする国民の無知、無教養、外国文化の盲目的崇拜や模倣を批判し、自らロシアの啓蒙教化にのり出した。即位の直後に彼女は、側近の一人イ・ヴェツコイ（1704—1779）と科学アカデミーの歴史学者ゲ・ミレル（1708—1783）のそれぞれに全般的教育改革の草案の作成を命じた⁶⁾。またヴェツコイの提案を基に、1764年にモスクワ養育院、スモーリヌィイ女子寄宿学校、1772年にもモスクワ商業学校を設立した。そして1765年に国内に農業の有益な知識や技術の普及と経済生活の改善を目的とした自由経済協会を設立し、1767年には新法典編纂委員会⁷⁾を召集するとともに新法典は法律の下で国内を理性と正義で支配するという政治的理念をうたった『訓令』⁸⁾を著わした。さらに1769年に「この国の無知と後進性を打破する手段」⁹⁾として社会の気風の矯正・教化のための諷刺雑誌『一切合切』^{フンヤーカヤ・フンヤーチナ}の発行を発案し、自らも執筆し、また1772年から喜劇『あゝ時よ』『ヴァルチャルキナ夫人』など約30種の喜劇や歌劇を著わし「ロシア演劇の教師」を自称した。

エカテリーナは、覚え書きに「神は私を導いたこの国で私とその幸福をひたすら願っていることを見ておわします。この国の栄光は私の栄光です。……あらゆる人々を幸福にすること、それを全体の目的にしたい。自由—これこそが一切の魂であり、それがなければすべてのものは死と化してしまふ。……自由はすべてのものを活気づける。……人間を奴隷にすることは、キリストの教えと正義に反するものです。人間はすべて自由なるものとして生まれてくるのです。奴隷制度は害をもたらすだけです。奴隷制は、産業を、芸術を、科学を損ってしまいます」¹⁰⁾と書き、また『訓令』の中には、「すべての市民の平等は、すべての者が同一の法律の適用を受けるということにある。言葉は決して犯罪とされることはない。信仰の禁止や制限は、市民の安寧と平穩にとって甚だ有害な悪徳である。自分の見解を自由に語ることができないのは国家における大きな不幸である。」（第5条34項）、「自由とは法が許すものすべてを為す権利である。……それは各人が為したいと欲することを為すことができ、為したくないことを為すよう強制されないということにある」（5条37項）¹¹⁾、「人々に法をおそれ、法以外にはたとえ誰にたいしても恐れさせないようにせよ。諸君は犯罪の予防を望むなら、人々のあいだに教育を普及させよ。人々を向上させる最も確実な、しかし最も困難な方法は、人々の教育を完全なものとするところである」（10条244項）¹²⁾と人間の自由、法の前の平等を高らかにうたった。これらはほとんどモンテス

キューやヴォルテールなどからの借り物であったが、当初は、例えば、農奴に自由を与えることが必要で、もし与えなければ「彼らは遅かれ早かれ、われわれの意志に抗して自身でそれを獲得するであろう」¹³⁾と書いたといわれるように、人間の自由・平等についてある程度具体的に考えていたと思われる。

しかしながら、それはあくまでエカテリーナ個人の頭の中においてであった。彼女は理想主義者ではなく、現実主義者であった。現実のロシアは農奴制を基盤とした貴族支配の社会であり、それを拠り所にした専制国家であることを彼女は十分に認識していた。彼女の理念は彼女の個人の中に留められ¹⁴⁾、その具体的政策は専制国家体制の維持強化であって、個人の自由は現実の社会秩序を乱さないかぎりにおいて寛容された。『訓令』は新法典編纂委員会で読み上げられたが、世間に公表されなかったし、委員会自体も貴族層と商人層との利害の対立をはじめ身分や職業の違いから議論は紛糾を重ね、何の結論も出さなまま解散してしまっただけである。とはいえ、フランスの啓蒙思想をはじめヨーロッパの新しい知識や思想がロシアに広がり、「無為のうちに萎えしぼんでまどろんでいる精神を蘇らせ、眠り込んでいた思想に活を入れるために上層士族層は異国の文学に広く行きわたっていた大胆で刺激的な理念を食欲に借用し始」め¹⁵⁾、また法典編纂委員会の議論は官吏の腐敗、農奴の非惨な生活実態や貴族地主の農奴への迫害等を浮きぼりにし、ロシアの知識人たちの現実社会への認識を高めていった。

さて、本稿は、エカテリーナ二世治世下のロシアを代表する啓蒙活動家エヌ・ノヴィコフ（1744—1818）の啓蒙教育活動と教育論を論じたものである。ノヴィコフは、新法典編纂委員会に書記として勤務し、委員会の解散後は退役し¹⁶⁾、出版活動に入り、諷刺雑誌『雄蜂』^{トルーベツ}（1769—70）を皮切りに次々に雑誌を発行してそれらの中でロシアの現実社会を嘲笑し批判するとともに、翻訳書や教科書など各種の書籍の出版活動を通じ、また国民学校の設立（1777）、教員セミナーの開設（1779）、学術友好協会の設置などを通じて啓蒙・教育活動を広く展開し、遂にはエカテリーナ二世の不興をこうむり国事犯として逮捕・投獄された（1792）。まさにエカテリーナ時代の申し子であった。ノヴィコフは、ロシアの現実社会の諸矛盾を暴き出すとともに、人間の自由と善なる生活を求め続けていった。エカテリーナは、国民の教化や教育事業のイニシアチヴを国家が握り、国家のための市民—臣民を育成しようとしたが、それに抗するようにノヴィコフは個人の善意による民間の手で、社^{オプンチエストヴオ}会のイニシアチヴで市民—人間の育成を求めていった。

I

ヨーロッパの啓蒙思想の影響を強く受けた貴族たちは、迷信や無知や誤った教育が「社会の一切の不幸」をもたらしてきたのであるとして、教育の普及と正しい教育に社会改善の道求め、教育を「万能薬」とみなした¹⁷⁾。その典型がイ・ヴェツコイであった。ヴェツコイは、『両性の若者の教育に関する全般的制度』において、「一切の悪と善——教育」であり、社会を善に導くための「唯一の手段」は、「まず教育の手段によって、新しい部類の人間、新しい父親をつくり出すこと」であり、そうすれば彼らは「自分が受けたのと同

一の真のそして確固たる教育を自分の子どもたちの心に正しく吹き込む、そしてそれが世代から世代へと何世紀にもわたって繰り返えされていくであろう」と主張し、「教育施設」に5～6才の男女の子どもを18～20才まで収容し、社会の諸悪の影響を受けないように実社会から隔離し、子どもたちは「外出することなく」良い教育環境の中で育てられなければならないとした¹⁸⁾。後はまた、現実の身分社会と農奴制を是認した上で、貴族、商人、そしてそれ以外の「卑しい素生」の人間のそれぞれが、その身分に相応しく人間として教育され必要な知識や技術を身につけていくことを求めたが、彼の教育観はルソーとロックを借りたもので一見ヒューマニズム的であって、それがエカテリーナに行き過ぎの教育観と映り、彼女の傍から遠ざけられた。

エカテリーナは、「新しい教育によって、私たちに新しい生活をもたらし、新しい種類の臣民をつくり出すこと」を期待して、「教育一切が健全なる身体と善への知的傾向をつくり出す」と考え、とりわけ「いんぎんと相応の本分」に重きを置き、道徳教育は「1) 善良、2) いんぎん、3) 善行、4) 知識」の4つのことがらを合わせ持たなければならないと語った¹⁹⁾。『訓令』の教育について(第14章)においても「市民は子どもたちに定められた法への敬意を育て、祖国の政府への畏敬の念を植えつけること」に努めなければならない²⁰⁾としている。エカテリーナにとって、教育は個人のためではなく国家のためでなければならない、従って教育は国家によって組織的計画的に推し進められなければならない。「市民的共同生活に準備する」ために「道徳的感情を練磨することに集中しなければならない、この事業を国家自身の手に握らなければならない」²¹⁾のであると主張する。エカテリーナは、ピョートル大帝を模範として、国家が国民教化のイニシアチヴをとるため自らその事業の先頭に立った。そして彼女自身ヴォルテール主義者といわれるように「理性と寛容」の精神を示そうとした。

1769年1月に『一切合切』誌がエカテリーナの側近ゲ・コジツキーの手で週刊誌として発行された。その企画・編集には女帝自らが参画し、それは「ハイカラや自堕落な人間、守銭奴や浪費家、偽善者や物知らず」などについて、彼らの悪徳を人間誰しもが秘めている「弱さ」としてとりあげ、「微笑みの心で」諷刺し、論じてやることを目的とした²²⁾。彼女の認識には、現実の種々問題や欠陥は彼女の即位以前の治世によってもたらされたもので「今日、これらの欠陥から解放されている」という自負があり²³⁾、彼女は、「理性と寛容」によって人間に内在する「弱さ」を克服して、人間を社会悪から解放することが急がなければならないとした。

『一切合切』が発行された一ヶ月後には個人の手になる諷刺誌が次々と世に出た。『あれとこれ』『あれでもないこれでもない』『ボレーズノエスプリヤートヌイム』『ボジョーニツナ スメーン』『精霊の郵便局』そして5月に出されたノヴィコフの『雄蜂』である。

ノヴィコフを『雄蜂』の出版にかり立てたのは農民問題であった。新法典編纂委員会で書記官として農民問題についての議論を記録し、傍聴したことが、彼に農民問題こそ焦眉の社会問題との認識を強くし、それは世間で取り上げられなければならない問題であるとの思いが彼を出版事業への道を選ばせた。彼は、啓蒙君主としてエカテリーナを崇拜し、『一切合切』に彼の期待をこめた。4月に出された『一切合切』で初めて農民問題—地主の

農奴や僕婢にたいする体刑一について取り上げられ、農奴や僕婢への同情を示した人道的態度が表明されたが、「しかし、誰が民を疵護できようか？ できるのは心が彼らの苦痛に同情することだけである。おゝ慈しみ深き神よ！ あなたの僕たちの心に人類愛を吹き込みたまえ！」と、農奴の問題はその所有者—貴族・地主—の個人的問題で干渉すべき問題ではなく、所有者の慈悲の心を待たねばならないとした²⁴⁾。期待を裏切られたノヴィコフは、いわばそれにたいする批判として『雄蜂』を出版したのであった。

『雄蜂』の扉には、「彼らは働いている、その一方で諸君は彼らの労働を貪り食っている」²⁵⁾という貴族—地主を批判した文が書かれ、『雄蜂』という語もロシア話で「怠け者」「寄食者」という意味も含んでいる。ノヴィコフは、官庁、裁判所や軍隊のいたるところで収賄や私消などの不正が横行し、村では公然とのさばる地主が支配し、農民を虐待していることをひとつひとつ暴き出していった。『雄蜂』は創刊からエカテリーナを憤慨させた。『一切合切』は『雄蜂』の裁判所での収賄の横行を諷刺した文²⁶⁾を取り上げ、ノヴィコフに反論した。ある特定の身分や職業について非難するのは諷刺とは呼べず、諷刺は「善なる心を持ち、人類を愛する」ものとならなければならない、人類愛があれば諷刺は「寛容」なものとなる。「寛容」でありしえすれば、ロシアには「罪惡」というものが存在しているのではなく、ただ「人間すべてに共通する弱さ」が存在しているにすぎず、「罪惡の弱さ」でなく「不完全からの弱さ」があるだけで、「理性ある人々は、唯一神のみが完全であることを認識しなければならない」ということが理解できる。そして「1) 弱さを罪惡と呼ばないこと、2) どんな場合にも人類愛を保つこと、3) 完全なる人間を見い出せると考えないこと、4) 我々に温良と寛容の精神を与えてくれるよう神に祈ること」を諷刺の心得とするよう求めた²⁷⁾。このような見解にたいして、ノヴィコフも直ちに反論した。彼は、「恭順なるあなたの僕ブラヴドゥリューボフ（註、真理を愛する者の意味）」の匿名で、「多くの人々は、良心の弱さに罪惡の名をあげたり、それに人類愛を付加したりすることは決してない。人々は人間にとって弱さはつきものであり、弱さは人類愛で包み込んでしまわなければならないという。そこで彼らは罪惡にたいして人類愛という布から外套を縫い上げた。しかしこのような人々の人類愛は罪惡愛と名づけるほうがふさわしい。私の意見では、罪惡にたいして寛容を以て対する人間、あるいは（ロシア語で言えば）大目にみる人間よりも、罪惡を正そうとする人間のほうがはるかに人間を愛しているのである」と収賄のような罪惡にたいして寛容であることの方が誤りであると書き、その上で罪惡と弱さとを分けて考えること自体がおかしいとして「金錢を愛することも弱さである。それゆえに弱い人間には収賄も強盗して金を貯えることも許し得ることになる。……要するに私は弱さの中にも、罪惡の中にも善を見ることはないし、ましてやそれらの相違も見ないのである。弱さと罪惡とは、私の見解では、まったく同じものであり、法を破ること——これが別のものなのである」と主張した²⁸⁾。この見解にたいして『一切合切』誌は、ブラヴドゥリューボフ氏は、「すべてをその上とことんまで咎打つことを望んでいると考えざるをえない」²⁹⁾と非難した。これを受けてノヴィコフも次のように切り返した。『一切合切』夫人は、我々に激怒し、我々の倫理的考察を罵詈雑言と呼んでいる。しかし、今や、彼女は我々が考えていたよりもずっと罪が小さいということが明らかである。彼女の一切

の罪は、ロシア語で考えを述べることができず、またロシア語の文書を精確に理解できないということにある。しかもこれらの罪は我々の多くの作家にもよくあることである』³⁰⁾と。ノヴィコフは、エカテリーナがロシア語を十分できないことが彼女にロシアの現実を正しく認識させていないのであって、そこに混乱の原因があることを指摘し、また同時にロシア語を話そうとせず、フランスにかぶれている貴族や彼らに追従する作家たちを批判した。『一切合切』と『雄蜂』との論争でノヴィコフを支持したのが『雑録』誌と『精霊の郵便局』³¹⁾であった。この後ノヴィコフは、匿名をプラヴダリュエボフからチストセルドフ(註. 正直の意味)に変えたがその暴露的論調は変らなかった。『一切合切』誌はノヴィコフへの批判をやめたが、『雄蜂』誌出版への圧力は強まっていった。『一切合切』誌は、当初1,692部を発行したがその後は減少し、最後の6号はいずれも600部しか印刷されなかったのにたいして、『雄蜂』誌は最初626部であったが1769年の末には1,240部に増加しており、エカテリーナにとって危険視すべき存在となった(他の雑誌は500~600部でいずれも1年間継続できなかった)³²⁾。1770年に入ると『一切合切』誌は『一切合切の仲買』と名を変え、もっぱら翻訳にあたった。『雄蜂』誌はこの年の4月まで存続したがその後廃刊を余儀なくされた。

1770年6月に『おしゃべり』という雑誌がフォン・フォカという人物で出版されたが実はノヴィコフによるものであった。それには『雄蜂』誌に載ったもののいくつかが再掲されたほか、「批判的性格の作品だけでなく、積極的性格の作品も」掲載され、ノヴィコフは、「さながら、自分の読者に一連の否定的人物と対峙させて、同時に積極的ヒーローのモデルを与えよう」とした³³⁾。そのひとつが小説『歴史的出来事』で、それは教養ある貴族で、自分の階層の模範的人物ードプロセルド(註. 善良の意味)の教育について描いたものである。ドプロセルドの父は、「彼の生れながらの才能を学問によって鋭利にし、教育によって一層豊かにする」ことに努めた。彼の教師は「理性、学問、立派な品行で知られた」ロシア人であった。彼は3カ国語を学び、「スラヴの著者の作品を読み、理性をみがきそして記憶を飾って、彼は物事について真の理解」を得た。また論理学、物理、数学、歴史と地理も学び、「我々の祖先の為してきたことも簡潔に知った」。それから父は彼を勤務の舞台一軍隊に向けた³⁴⁾。おおよそこのような話であるが、この人間は、ピョートル以来のあるべき貴族のモデルであったが、奉仕者として自覚を失い、外国の文化に拝跪し、閑暇をもてあそび寄食者に墮した貴族にたいする諷刺にほかならなかった。

この時期にロシアの演劇は発展を見せ、フォンヴィジンの名を一躍高めた諷刺喜劇『旅団長』などが発表されたが、エカテリーナ自身も筆をとり演劇熱を一段と高めた。

ノヴィコフは、1772年にエカテリーナの匿名の諷刺喜劇『おゝ時よ!』の発表をまって、『画家』誌を出版した。それは、『おゝ時よ!』の文章に筆を加えたり、彼女の文才を持ち上げたりして、彼女の諷刺の精神に追従しているよう装った。その創刊号では、「我々の悪徳、根深い悪い習慣、濫用そして我々の放蕩的ふるまいを公正な眼で見つめよ。諸君は我々の嘲笑の対象となっている人々の群を見つけ出し、そして諸君は幸いにもそれほど自由な野原が残っているかを見つけよ。自分の心から一切の偏頗を根絶せよ、公正であれ。背徳的人間はどんな自分であれ等しく軽蔑せよ」³⁵⁾と書いている。しかし、ノヴィコフは

暴露的風刺をやめなかった。彼は『ベズラススードへの処方箋』で地主の非道ぶりを暴き出した（註 ベズラススードはその地主の名で、無分別を意味している）³⁶⁾。そして農奴制にこそ社会悪の根源があることを明らかにしようとした作品を代表するのが『イ・テ・某氏の旅行記の断片』で、イ・テ・某氏から彼が各地の村で見聞した農民の悲惨な生活、崩壊寸前の村の状態を記録した日記を依頼されて掲載したとしているが彼自身が書いたといわれる。「この旅の三日間で賞讃に値いするものを何ひとつどこへ行っても見い出すことができなかった。貧乏と奴隷がどこへ行っても農民の姿として私の前に現われた。耕やされていない畑地、実がろくに入っていない作物は、これらの場所の地主たちが農民にどんな仕打ちをしているかを私にはっきりと語ってくれた。……私はどの村へ行っても農民たちの貧困の理由を聞かすにはおられなかった。……まったく悲しむべきことに、いつもわかったことは彼らの主人自体にその責任があるということであった」、村は零落し、家も通りも「貧困と不潔」そのもので、ほりこと汚臭に息がつまりそうであった。農民たちは賦役に駆り出されてほとんど姿がなかった。あまりの汚さと悪臭のため旅人は気分が悪くなり卒倒しそうになり、「冷い水を頼んだ。駁者が井戸から水を汲んできてくれたが、その悪臭にとても飲めたものではなかった。……村のどこにも澄んだ水はなかった。……私は地主に、『お前さんは自分を養ってくれる者たちの健康を保つことに何の配慮もしないのか』と怒鳴った」。このように、ノヴィコフは旅行者に、地主が農民から残らずまき上げ、掠奪し、虐待して、村を零落させていることを語らせたが、最後に「豊かな、何不足ない農民を見るために」「豊かな村」に向けて旅行者が旅立つところで終わっている³⁷⁾。「零落した村の地主」は暴君であるのにたいして「豊かな村」の地主は農民の「父親」であった。もっともこの村の具体的描写はされることはなかった³⁸⁾。

ノヴィコフは、『画家』誌の中で地主に農民を人間として扱い生活改善に努めるように呼びかけたが、それでは地方の地主は『画家』誌にどのような反応を示したかという設定で、地方地主の典型的人物を描いたのが、『地方地主の息子たちへの手紙』であった。この地主は、収賄で官職を追われ領地に戻った地主で、自分の農奴には暴君であるが、敬虔なるキリスト教徒で、世話好きの優しい父親である。彼は『画家』の論文について、「百姓どもが不幸であることに理屈を並べてなさる。なんとも困ったことだ。百姓どもが金持になって、我々貴族が貧乏になってしまえばいいとでも望んでいるのか。そんなことを神がお命じになるはずがない。どちらの一方が富むにふさわしいのか、地主か百姓か。……聖書にも書かれているではないか。互いに重荷を背負い合いなさい、かくしてキリストの掟を果たしなさい、と。彼らは我々のために働いており、一方我々は怠けるならば彼らに答をくれてやる。こうして我々は彼らと共に等しく働いているのだ。休まず働きなさい、というのが神のおぼしめしなのだ」と書いている³⁹⁾。真のキリスト教徒である地主が農民を答うつことが自分の仕事と認識する誤りは、真理を認識する能力の欠如にほかならず、それは皮相な知識しか与えない教育の結果にほかならず、「真理はいつも理性に従う」⁴⁰⁾のであり、それは「科学」によって正しく教育されなければならないとした。

これまで見てきたように、ノヴィコフはロシア現実社会での不正や悪、貴族一地主の墮落した生活、農民の非惨さを赤裸々に暴き出していったが、彼自身こうした事実を直視す

ることこそ、正義や真理の何かを知り、それぞれの身分や職業が「真の市民の義務を遂行する」⁴¹⁾道を開いていく基であると考えた。彼は、ロシアの社会構造的欠陥にではなく、人間の精神的欠陥に社会悪の根源を見ていたという点においてはエカテリーナと同様に啓蒙思想の影響を受けていたが、エカテリーナのように悪への寛大であることによってではなく、悪そのものを暴き出しそれを正そうとしたことに相違があった。もちろん社会的変革ではなく精神的変革を求めたことに自ずと限界があった。

ノヴィコフは、再び『画家』誌への政府からか圧力が強まると廃刊し、学術的—歴史的試み、すなわち、『古代ロシア書誌』に着手した。これは14～16世紀の古文書を収集編纂したもので1773～1775年に毎月出版され、エカテリーナからの助成金も得た。この仕事と平行して、1774年にまた諷刺雑誌『財^{コンニリョーク}布』を出版した。『財布』誌の創刊号で『古代ロシア書誌』について、「古代ロシアの善行」を知らせることを目的に、「祖国に心から捧げる」⁴²⁾と書いている。彼はその前に『ロシア作家の歴史辞典の試み』(1772)を書き、人名辞典の形でロシア作家の功績、優秀性を示し、ロシア人の遺産や能力によって社会の改善を果たさねばならないとするナショナリズムがそこに見える。ところで財^{コンニリョーク}布というのは当時かつらを入れる皮革製や琥珀織の袋のことであって、外国かぶれを諷刺した。外国のモードに身を飾り、外国の流行を追い求めることが、貴族を零落させ、彼らの性格を墮落させ、国家に多大の損害をもたらしていると批判した。その創刊号は、詐欺師で金銭欲の強い月並のフランス人とロシアの対話、それに続いて、「ロシア人の善行」を熱心に擁護するドイツ人とロシア人の対話、という形をとっていた⁴³⁾。彼は、フランス人というより、ロシアの上流社会でみせかけの教養を誇示し、自由主義者を装うヴォルテール主義者を嫌った。彼の諷刺にはロシアの諺や格言がしばしば使われており、例えば「盗人は涙もろく、ペテン師は信心深い」にもみられるように、農民の洞察力、知恵や賢明さを見ており、そこに彼らへの教育の可能性と将来への願望があった。この後彼は諷刺作家から啓蒙・教育活動家へと転身していった。

II

エ・プガチョフに率いられた農民の大暴動(1773—4、プガチョフの乱)は、ロシア中を震撼させ、とりわけ貴族階層を戦慄させた。プガチョフはピョートル三世を僭称し、農民に自由と土地を与えることを約束して勢力を挙げ、各地で貴族—地主を襲いながらモスクワに迫り、エカテリーナ政府を脅かした。政府は1年がかりでようやく鎮圧に成功したが、この事件のもたらした影響は非常に大きかった。

エカテリーナは、ディドロとの談話について「私は彼といろいろなところについてしばしば話し合った。しかし、それは自分に役立てるためというより、むしろ好奇心からにすぎなかった。もし私が彼に本気で耳を傾けたなら、私は帝国を逆さにしてしまったであろう。立法、行政そして財政を、非現実的な理論のために完全につくり変えることになってしまっていたであろう。……私は彼に次のように率直に言った。『ディドロ—氏よ、私はあなたの見事な想像力があなたに吹き込んだことがらのすべてをこの上ない満足をもって

拝聴いたしました。私が十分理解したあなたのすばらしい原理を用いたら、すばらしい本を著すことができるかもしれませんが、諸事を解決することはできないのです。……あなたは紙の上で仕事をしているにすぎません。紙はなめらかであなたのいうことを聞き、あなたの想像も、あなたのペンも妨げることはないのです。しかし私は、皇帝として、人間の皮膚の上で仕事をしているのです。それは、はるかに敏感で慎重を要するのです』⁴⁴⁾と書いている。エカテリーナは、啓蒙主義にいたずらに熱中しなかった。啓蒙思想は彼女にとって、いわば「知力の訓練」⁴⁵⁾であって、彼女の思考は「奥深さや思慮深さより、柔軟さや敏感さ」が勝っており⁴⁶⁾、彼女自身は女帝として現実を見てとり、その動きに対応して行動していった。プガチョフの乱は、彼女に、ロシアに必要なのは啓蒙主義の「理性と寛容」ではなく専制主義の力であり、そのためには何よりも強力な中央集権国家体制が確立されなければならないことを教えた。プガチョフの乱で弱さをさらけ出した地方行政機構が改革された(1775年県行政制度の実施)。国内の秩序の維持と平穩のために、国家の指導に従順な国民をつくり出さなければならず、国民教育制度の具体化を図らなければならなかった。貴族階層と富裕な商人層には、地方および都市の行政の担い手として中央の支配の支柱となることを期して特権許可状(1785)が付与され、特権者として完全に解放された。しかし彼らは、エカテリーナの期待に反して、とくに貴族階層は地方の支配者として君臨していった。一方法的に貴族—地主の私的所有物とされた農奴は彼らに完全に隷属し、その人権を奪われた。ロシアの現実社会は矛盾をますます深めていき、やがてロシアに普及した啓蒙思想、そしてアメリカの独立戦争とフランス革命の影響がエカテリーナ政府を脅かしていった。『ヴォルテール主義』の言葉は『暴徒』の観念と同じほど危険な意味を持ち、新法典編纂委員会のためにエカテリーナによって書かれた『訓令』は禁書となった⁴⁷⁾。ロシアの知識人たちの思考は内面化し、彼らはセンチメンタリズムや神秘主義思想に走り、現実の社会から逃避し、非社会的になり、個人の内面的模索に自己を求めた。その中にあって、フォンヴィジン等とならんでノヴィコフは、ロシアの現実社会の中に人間の解放を求めていった。

ノヴィコフは出版活動をいよいよ本格的に展開していくが、彼の諷刺的発言はひかえ目となり、哲学的発言を強め、啓蒙・教育活動に積極的に取り組んでいった。

ノヴィコフは、『古代ロシア書誌』に続いて『ロシアの古代人—古代文化』(1776)とロシア古代史研究に従事したあとロシアで最初の文献解題『聖ペテルブルク学術報知』を約1年間にわたって出版した。その創刊号には、『訓令』⁴⁸⁾そして新法典編纂委員の活動の記録や激論のあった農民問題に関する審議内容が掲載された。この雑誌は、主として歴史的内容の出版物や公文書類が掲載されたが、他にエフ・プロコポヴィチ、ア・カンテミールやロモノソフなど歴史的に名を残した学者や作家、当代の芸術家や詩人などの人物評伝が載った。

『聖ペテルブルク学術報知』の出版のかたわら、1777年にノヴィコフは月刊誌『朝の光』^{ウートレナ・スヴェータ}(1777~1780, 1779年5月からモスクワで出版)を出版した。この雑誌は哲学的内容の論文が中心で、ノヴィコフも人間についての哲学的見解をいくつか載せている。この雑誌の出版は、ノヴィコフの啓蒙—教育活動の具体的第一歩として大きな意味をもつもの

であった。彼は、この創刊にあたって、「この雑誌の売り上げは、貧困な子どもたちの学校の経費にあてる」⁴⁹⁾ので購読の予約者も協力をしてくれるよう呼びかけた。『朝の光』は最初の1年間875冊を売り上げ、純益で2,000ルーブル越え⁵⁰⁾、翌年には1,000冊余りにふえ大成功をおさめた。売り上げを基金として1777年秋にはペテルブルクに国民学校を開設し、さらに翌年にもう1校の開設に成功した。ノヴィコフは、啓蒙—教育活動は、政府に依存するのではなく、寄付金などの個人的善意によって、つまり「社会」によって推し進められるべきものであるとした。それは、教育は国家のためにはなく、個人のためになされるべきもので、その手段をもたない人々のために「社会」が力を貸すべきであると考えた。こうした考えは、1772年に試みた書籍出版促進協会の設立にすでにあつた。ノヴィコフは、1779年に10年契約でモスクワ大学附属印刷所を借り受けると、ここでの出版事業を基盤に「社会」の手による啓蒙—教育活動に本格的に取り組んでいった。廃刊寸前のモスクワ大学の機関紙『モスクワ報知』の立て直し(1779~1789)、「教員セミナー」(1779)、「学術友好協会」(1782)、「言語セミナー」(1782)の設立、モスクワにロシアで最初の公開図書館そして貧乏人のための無料薬局の開設、さらにモスクワをはじめ地方都市に書店を設け出版物の販売網の確立(モスクワに20の本屋、18都市に書籍取扱所)や飢餓救済活動(1787)などである。

ノヴィコフは自分の哲学的見解を『朝の光』誌に6篇——『序章』(創刊号)、『神と世界の諸関係における人間の価値について』(創刊号)、『新しい年に向けての考察』(第2号)、『真理』(第4号)、『善行について』(第9号)、『終章』(第9号)——を発表している。

ノヴィコフの思想については、彼がフリーメーソンの会員であつたことから、帝政期には神秘主義者とみなされてきたが、今日ではそれは否定されている。今日の評価では、ロシアのフリーメーソンは非社会的で死後の世界に救いを求めようとすることに特徴があるが、ノヴィコフは啓蒙—教育活動を展開し、「社会に有用なる市民」を求めていったことから、彼は思想的にフリーメーソンに引きつけられたのではなく、それを便宜的に利用していたのにすぎず、思想的には自由主義者であり続けた、というのが一般的である。例えば、1890年代にヴェ・ヤクーンは、フリーメーソンのリーダーのモスクワ大学教授ゲ・シュヴァルツ(1751—1784)が『学術友好協会』を設立し、ノヴィコフがそれを援助したと二人の友人関係を主張しているが、1951年のゲ・マコゴニチェンコは、シュヴァルツは、ノヴィコフがフリーメーソン会員として教義の普及を怠るなど任務を放棄していると非難し、敵意を抱き、彼の活動を妨げ、彼の設立した「学術友好協会」を学生に布教の場に利用しようとしたとして二人の敵対関係を主張した。依つて立つ史料からみて後者が正当化されよう。しかし、ソヴェート政権に追放された亡命思想家エヌ・ベルジャーエフの「ノヴィコフ自身は、フリーメーソンこそ本当のキリスト教であると考えた。彼は英国人のフリーメーソンに近かつた。錬金術や魔術や心霊学に対する情熱は、彼の精神にはおよそ無縁であつた。……メイソンの中の哲学者として著名な人物はシュヴァルツであつた。……シュヴァルツには哲学的訓練があつた。彼はノヴィコフとは反対に心霊学に関心があり、自らバラ十字会員を以て任じた」⁵³⁾という見解がより妥当と思われる。英国のフリーメーソンについては、「英国メーソンの急速な発展は、フリーメーソンの理想が宗教界、政界

の新思潮と合致していたことで、専制政府も絶対主義社会も存在しなかったことによっている。加えてこの結社が早くから貴族社会のエリートによって支持され、それゆえに社交的名声が高く、成功した商人、知識人に強くアピールしたのである。個人と社会の道徳、自由、平等、平和という最少限の信条にもとづく宗教的寛容の精神は本質的に新興中産階級のもので、このため英国人の行くところ世界中にロッジが開かれたのだ⁵⁴⁾という記述があるが、ノヴィコフは思想的には確かに英国のフリーメーソンに近かったといえる。しかしながらロシアで勢力を持ったのがドイツのバラ十字団であり、ノヴィコフが入ったのもそれであった。

ロシアに、フリーメーソンの支部が最初に出来たのは1731年といわれるが、プガチョフの乱後に急速に広がっていった。プガチョフの乱は、貴族階層や知識人層に衝撃を与え、エカテリーナの自由主義思想への否定的態度と相まって、彼らは精神的に動揺し、自分の救いをフリーメーソンに求めた。彼らは、現実の矛盾の多い世界から個人の精神的世界に逃避しようとし、神秘主義的強格の強いフリーメーソンに魅かれ、それにこたえるかのようにドイツのベルリンに本部を置くバラ十字団の支部がロシアに広がった。

プガチョフの乱はノヴィコフにもショックを与えたが、彼はむしろそれによって啓蒙—教育活動の重要性をより強く意識したのであって、精神的隠れ家を求める必要はなかったと思われるのに、1775年にフリーメーソンに入り、その後その指導者の一人とみなされていったが、それは何故であったか。ノヴィコフは、それについて「ヴォルテール主義と宗教との岐路に立っていて、私は支点を持っていなかった。あるいは精神的平穩を確かなものにする根本的見解を有していなかった。……しかしそれゆえに思わず入ったのであった⁵⁵⁾と回想している。フリーメーソンは、「彼にとって彼の探求の論理的仕上げではなかったし、彼が支部に入ったのではなく、支部が彼の弱味をついて、彼の所へやってきたのである⁵⁶⁾ということであった。

ノヴィコフが1779年にモスクワに移ったが、そこはロシアのバラ十字団の中心地になっていた。指導者の一人公爵エヌ・トルヴェッキーはその掟を次のように定式化した。「真のバラ十字団員は、支部に入るまでと同じ人間であってはならない。団員は賭け事や色欲といったたぐいの空虚なる慰みを自身から遠ざけねばならない。殊に自分の家にあっては……キリストの真の戦士として、その家が教会であり、そこで彼は自己を知ることそして聖書を読むことに励み、自分の無力、自分の罪業、自分の墮落と背徳を知り、いましめ、……団員は温良につとめ、悪魔による心の慰みを断ち切り、かくして謙遜温順によって身を飾り、人前でそして見知らぬ兄弟の前で自らを模範となるように輝かせ、自分をよく知らせ、彼らの中にあることを知らせねばならない」⁵⁷⁾神へのざんげと祈りによって、自分の心にある悪に打ち勝ち、精進に励み、自己の完成をめざすという非社会的・自己満足的な世界に安住の地を求めた。彼らは「至福」への道は「天啓」によって導びかれるとし、現世ではなく来世の「永遠の世界」を信じた。ロシアには神秘主義的性格の著書が多数翻訳されていったが、フリーメーソンのものではヨハン、マソンという人の『自分自身の認識』が代表的なものである⁵⁸⁾。

ノヴィコフは思想的にはバラ十字団とは相入れなかった。『朝の光』誌での哲学的思索

は「人間のもつ高い価値を理解する」ことを目的とした。『序章』で人間は「このつくり出された地上とあらゆる物質の真の中心」であり、「重要な価値あるもの」であることを主張してその後の論を展開した。「人間の本性には、人間にたいする真の尊敬と心からの愛を我々に起させる多くのものがある」のであり、人間が「この世の主権者」である。「我々が現実に関わりなく結びついている物質の一部として人間を見るその時にのみ、人間はその内にあるあらゆる才能をもって光輝いて現われる」と人間は現実の世界の中にその位置をもってその存在を示していくとした。「金持や貴顕な人間というのは、人間的本性から生きているのではまったくない」のであって、「金持や貴族であることで高慢になるのは笑止千万なる傲慢である」と人間の価値の決定は、身分や富であってはならないとする。人間は「主権者として尊ばれる」のであり、「それゆえ、すべての人間は、なんらかの形で自分の中にある自己に『この世のすべてが私のものである』ということができる」のである。しかし真実は、「価値のない見栄（官職や身分）に眩惑されて、どうでもいいことに自惚れている人間が多すぎ」て「真の人間」となりえない。「自分の真の価値」「人間としての高い価値」を見い出さなければならない。神は創造主であり、「賢明なる建築家」である。「神が我々をつくれ、そして我々が自分の偉大さ、力、名誉、至賢を宇宙に示すために衣食住、いのち与えたもうている」のである。神が我々をつくれ、つくられた我々は自分の創造主をほめたたえる。神につくられた人間は偉大であり、人間を通して神の偉大さが示されるのであって、従って人間は神の奴隷であっては、人間は何もつくり出すことはできない。「この世のあらゆる物質は、他のあらゆる物質の目的であり、そして他のあらゆる物質の手段である」つまり人間は「目的」としてまた同時に「手段」となって互いに助け合っていき、「人間の偉大さ」を発現できる。実際の人間の価値は、「神によるのではなく、人間自身によっている」のであり、何よりもまず「人間の社会的・有益なる活動」によっているのであって、こうした人間だけが「真の人間」になることができる。「真の人間」は「時を無為に過ごしてはならず」「祖国に奉仕しそして有用とならなければならない」ならない。人間つまり市民として生きること、そして「真の愛国者そして正しき人間」となることである⁵⁹⁾。

このようにノヴィコフの人間観は、宗教的・道徳的であり、「真の人間」と市民とは同じ意味である。「共同・社会生活体」としての社会の一員としての自覚と責任を遂行する人間で、社会の規範となっているのが「善行」であった。^{ドブジョヅチエリ}「善行の精神は、後になって自分が利用するために善行を為すことではなく、幸をつくることに慣れるためにのみ善行を為すということにある」⁶⁰⁾のである。「善行」を為す「真の人間」は、「人間の知識」「科学」に精通して、理性を教化しなければならない。「教化された理性は、賢明なることに人間を形成し、心を清め、人間を善行へ準備教育してくれる」のである。そしてそれに芸術が加わらなければならない。なぜならば、「人間は、知識に芸術をさらに加えて身を飾れば、最善となるのは疑う余地がない」からである⁶¹⁾。

ノヴィコフとフリーメーソンの関係について、「ノヴィコフはしばしば彼らの道具であった。そしてまた彼らを彼は道具として利用した」⁶²⁾という見解がある。そしてさらに「ノヴィコフは、いく人かの貴顕と金持を引き入れ、彼らの寄付でりっぱで大きな印刷所をつ

くった。そして若者たちに原稿料や著作権に高く支払い、それらを書店に安く売って若者たちの才能を鼓舞した」⁶³⁾という評価がある。これらに従えば、フリーメーソンは、ノヴィコフの印刷所を布教の手段として用い、一方ノヴィコフはフリーメーソンの有力者を事業拡大に利用して自身の所期の目的を達していったということであった。ここから推察すれば、シュヴァルツとノヴィコフとの対立は、元来相入れない思想—人間観の対立があったとしても、それより出版物をめぐる対立が大きかったと思われる。

ノヴィコフが出版事業者としていかにすぐれた手腕をもっていたかを次の数字が示してくれる。

1771—1780年にロシアで1,466点の書籍が出版され、そのうち167点(全体の11%)がノヴィコフが出版したもので、さらに1781—1790年には2,685点のうち749点(全体の28%)が彼によるものであった⁶⁴⁾。1779—1792年について見るとノヴィコフは合計で891点を出版している。文学作品—詩文、散文、戯曲で、翻訳を含む—が381点歴史、哲学、経済、そして政治に関するもの(翻訳も含む)が120点、教科書、実用書(家庭医療手引、辞書など)、公文書類が194点、その他である。その他の193点というのは、フリーメーソン関係のものが66点で、残りが教訓的性格のもので英語、独語、仏語の翻訳が大部分である⁶⁵⁾。フリーメーソン関係のもの66点といっても、ノヴィコフ自身の手で出版したのはわずかに17点で⁶⁶⁾、しかも1785年以後は出版しなかった⁶⁷⁾。

III

ノヴィコフの啓蒙教育的活動についてももう少し具体的に考察していくことにする。

上述のようにノヴィコフは、『朝の光』誌の売り上げを基金に2つの国民学校—「ロシア最初の貧乏人と孤児のための国民学校」⁶⁸⁾の設立に成功したが、これらの学校はエカテリーナーの干渉を懸念して「エカテリーナ国民学校」「アレクサンドル国民学校」と命名された。ノヴィコフは、学校事業を始めるにあたって、これは「人間にまた祖国にたいする任務として大いなる名誉をもたらす」ものであり、「人類の福祉への新しい道」を開くものであるので、「自分と『同じ土地に住む人々』⁶⁹⁾にたいする真の愛国的熱意」を示してくれるように呼びかけた⁶⁹⁾。国民学校の設立は大きな反響を呼び、ノヴィコフは『朝の光』誌に「『朝の光』の出版に携わっている者たちは貧困な子どもや孤児たちを救済する事業に取り掛ったが、この事業にたいして深い思いやりや好意にあふれた新たな援助や協力や励ましがとぎれることなく寄せられている」⁷⁰⁾と報じている。援助の手は自由主義的貴族、商人や僧侶など各階層から差し伸べられ、モスクワ大学の貧しい学生たちも『朝の光』誌の翻訳作業を無報酬で行うなどの協力を惜しまなかった。

これらの国民学校は、貧乏人と孤児の無料教育施設として発足したが、自費による入学も認めており、1778年にその数は26人であった⁷¹⁾。1779年の『朝の光』誌などで学校の実状について報告されている。二つの学校には、男女合わせて92人の子どもが学んでいた。彼らは、兵士、馬丁、番人、従僕、印刷工、画工、具職人、小商人、寺男、下級吏員や解放農奴などの子どもであった。学校には寄宿舎が併設され、多くは衣食住の一切を給付され

たが、その一部の給付を受けた子ども、また通いの子どももいた。教科目として、読み書き、文法、算数、ドイツ語（読み、書き、会話）、幾何、絵画、ダンス、神の掟があった。授業は、1年間を通じてフルタイムで行なわれたが、子どもの年齢が5歳から16歳までと幅があった上に、学習意欲や能力差が大きかったため、それらを考慮して進められた。もっとも重視されたのが道徳教育であった。それは「善行と祖国への愛」に基づいたもので、勤勉、規律正しさ、博愛、仲間意識、助け合い、誠実、清楚、整理整頓などの習慣を身につけることに注意が払われた。それは説得を手段とし、話し合や激励が広く用いられた。これらの学校の特色として身体教育と美的教育が重視されたことがあげられる。身体教育としてダンス（音楽に合わせた）がとり入れられ、美的教育は民衆に芸術的趣味—文学や演劇へ関心を引き起こすことを目的とした。

このように、ノヴィコフの国民学校は、ヴェツコイのように貴族などに奉仕するもの（これを第三身分と呼んだ）の養成や技能や実用的知識だけの習得を目的としたものでなく、人間性の涵養に重点がおかれ、彼のいう人間としての市民の育成であった。

ノヴィコフは、「我々の企てにたいする激励は……福祉へのたゆまぬ援助へ駆り立てている。……学校は我々の力をますます強めてくれ、そしてこれらの施設に堅固な土台を置く希望を与えている」⁷²⁾と学校事業の成功について書いているが、彼には、「ロシア全土に多数の学校」を開設すること、それも「社会のイニシアチヴでそして社会の基金で国民教育に基礎を置くこと」⁷³⁾が念願であった。彼は「我々の善なる手本は他の善良なる人々を鼓舞することができる。彼らの貧しい人々への愛情が、持たざる同国人への教育がやがて磨き上げられていくことだろう」⁷⁴⁾とその期待を述べている。

ノヴィコフの共感者たちは、彼の学校をモデルとして、各地に国民学校を設立していった。それらについて1781年から1784年にかけての『モスクワ報知』紙が報じている。すでに1779年にトヴェリに社会の手による3校目の国民学校が開設しており、1781年にはペテルブルクに6校の国民学校が存在している。ペテルブルクではこれらの学校を運営するために13,663ルーブルにのぼる寄付金が集められ、生徒数も426人（そのうち35人が女子）にのぼり、彼らは、「商人、小市民の子弟で、他に将校、下級官吏、兵士、廷臣や領主の下僕の子弟も含まれ」ていた⁷⁵⁾。『モスクワ報知』紙は1781年1月16日付でクレメンチュークに「男女の子どものための学校」が開設されたことを、1782年2月17日付で「新築の都市学校が開設し、……まずはじめに126人の若者の教育にあたる協会を定めた」ことを、1783年4月17日付でウラジミールに「若者のための学校が設立され、そこではロシア語の読みと正字法、フランス語、算数、幾何、カテキズムと市民法の手ほどきが教えられる」ことを報じている。また1783年7月14日付でモスクワに3校の国民学校が開校した記事が載っている。それでは「このように国民学校は、あらゆる身分の子どもたち、貴族や僧侶の子弟も含めて、が入学でき、そのためにゆとりをもった特別な学校が建てられている。これらには持たざる者の子どもたちは無料で、持てる者たちはそれ相応の料金で入学できる」と報じられている。その他の都市でも同様な形で国民学校が開設され、1783年にクールスクに、1784年にトゥーラに、1785年にヴォロネージとニージニエ・ノヴゴロドに開設された⁷⁶⁾。

エカテリーナはノヴィコフの首唱になる社会による学校事業の広がりを見、苦々しい思いで見ている。すでに1779年に、ドヴェーリとカルーガの貴族団が自分たちのイニシアチブで学校を開設する意向を持っていることを聞いて、エカテリーナは彼らに「皇帝から下される学校開設についての一般的規則や教示を待たねばならない」と私的に学校を開設しないよう警告している⁷⁷⁾。

エカテリーナは、国民教育制度の確立に本格的に取り組むことを決意し、彼女にたいしてグリムと科学アカデミーの教授エフ・エピヌウスはそれぞれサガン教育システムを提言した。サガン教育システムというのは、サガンのシレジア人地区修道院長ヨハン・フェルビガー (1724—1788) が、1765年に『シュレジエン大公領の都市と村のローマ・カトリック住民の学校のための教育規則』を作成して、教区内の学校改革を遂行したが、それがドイツの他のカトリック公国にも広がっていったものである。オーストリア大公のマリア・テレサは1774年にフェルビガーを招いてオーストリアの学校改革を命じた。彼の指導下に行なわれたオーストリアの学校改革について、エカテリーナはマリア・テレサの子息ヨゼフⅡ世を通して知っていた。エカテリーナはサガン教育システムをモデルとすることを決めるとヨゼフⅡ世に協力を要請した。ヨゼフⅡ世は、セルビア人地区の学校長エフ・ヤンコヴィッチ (1741—1818) を推挙した。サガン教育システムは、ハンガリア人、チェク人、ポーランド人居住区にも普及しており、ヤンコヴィッチはハンガリアでの学校改革に関係したほかスラヴ人地域で約100校の学校を開設し、その指導にあたりるとともに多数の教科書や教師用指導書を著すなど当時有数の教育家であった。エカテリーナは、ヤンコヴィッチを招くと1782年に「ロシア帝国内に国民学設立のための委員会」を設置し、エピヌウスと二人の高官を委員に、ヤンコヴィッチを顧問に命じるとともに、その下に科学アカデミー、モスク大学とそのギムナジヤの教授や教師を作業メンバーに加えて、具体的な教育改革に着手させた。

委員会は教員養成の問題からとりかかり、1783年にペテルブルクに「中央国民学校」を設立した。校長にヤンコヴィッチが任命され、教師として科学アカデミーとモスクワ大学の若い教官や学生があてられ、生徒100人が、宗教セミナー生から強制的に集められたほかに兵士、下級官吏、自由農民や解放農奴の子弟から公募された。その後、委員会の活動は順調に進められていった。教育改革の見通しが明らかになると、エカテリーナは、1785年に国民学校では今後委員会発行の教科書や教師用指導書を用い、それに従って教授することを命じる勅令を発するなど、国民教育事業を国家のイニシアチブによって、国家の管理下で進められなければならないことを明言するとともに、「教師は知識と能力を試験によって、また資格と考え方を確実に証明させることによって認可された者でなければ採用してはならない。これを充たしていないと判明した学校はすべて、慈恵院⁷⁸⁾の厳格なる許可によるものでない限り、将来我々の命令があるまで、いかなる学校⁷⁹⁾としても認められない⁸⁰⁾」ことを命じた。これら一連の措置によって、ノヴィコフの影響下にあった「社会」による国民学校や、外国人による女学校などの有資格教員を有していない私塾的学校はすべて監督官庁の厳重な監視下におかれ、やがて閉鎖を余義なくされていった。こうしてノヴィコフの学校事業も挫折してしまった。エカテリーナの期待通り、1786年に中央国民学

校から100人教員が25の県に派遣され、「ロシア帝国国民学校令」が發布された。学校令は、全階層的で、各県庁所在市に5年制の中央国民学校と各郡庁所在市に2年制の小国民学校を設立し、ロシア全土に学校網をはりめぐらすことをうたった。教員養成のための中央国民学校は教員セミナーと改称された。

ノヴィコフは、モスクワ大学附属印刷所での出版事業を通じてモスクワ大学の教授や学生と親密な関係を結び、彼の事業の有力な協力者を得た。彼は、国民学校事業において教員の不足に苦しみ、また貴族が外国人を子弟の家庭教師に雇い入れる風習に不満を抱き、ロシア人教師の養成の必要を痛感し、1779年モスクワ大学での出版事業開始とともに、大学内に教員セミナーの開設を呼びかけた。彼は、大学の教授たちの協力を得て、当時ロシアで最大の企業家ペ・デミドフの大学への寄付金の一部でギムナジヤの非貴族部門に教員セミナーを附設することが出来た。非貴族部門に附設したのは、非貴族からの入学をより期待できたからであった。ギムナジヤから15人が入学し、1782年に30人在籍し、大学生も聴講していた⁸¹⁾。教員セミナーについての詳細は不明であるが、これはヤンコヴィチの指導下の中央国民学校に先んじたロシアで最初の教員養成施設であった。ノヴィコフは、1781年に「大学生の集い」を組織し、学生たちの指導にあたった。この「集い」は、大学を卒業した若い人文科学の博士や学士と上級クラスの学生たちが、毎週一回集って、新刊の文学者や雑誌や自分たちの作品を批評し合ったりするほか、美学、哲学などについて論じるなど、若者が自由に討議する場であった。彼らの多くはノヴィコフの出版事業に参加した。そしてノヴィコフは、啓蒙—教育活動をより大規模に展開するために、いわばロシア学術・教育の振興の中心となる機関が必要なことを教授やデミドフなどに呼びかけ、フリーメーソンの有力者も引き入れて、基金を募った。それが1782年に発足した「学術友好協会」であった。協会は、科学の研究と普及に努め、科学が「より大きく開花し、自分の実をつけることができる」ようにすること、また「自分費用で多種多様の書籍、特に教科書の印刷に、そしてそれらを学校に供給することに」努めることを自己の課題とした⁸²⁾。ノヴィコフは、とくに苦学生の経済的援助に力を入れ、協会から給費した。学生の一人は、「学生一人あたり100ルーブルの生活費がかかったと思うが、生活費はいつもノヴィコフから届けられた」⁸³⁾と書いている。またノヴィコフは、協会の課題を達成するために文学書の翻訳、出版や編集などの専門家の養成が不可欠であるとして、1782年に言語セミナーを大学に開設した。その定員は35名で、大学生の中から入学者を募った。協会の給費生で特に優秀なセミナー生は留学の恩典が与えられた。例えばペ・ストラーホフはこの恩典に浴し、2年間留学し、帰国後モスクワ大学の教授となった⁸⁴⁾。

ノヴィコフは『モスクワ報知』紙を啓蒙—教育活動に利用することを考え、1783年からそれに『モスクワ報知の付録』を無料で添付した。1783～1784年だけで186号が出され、その内容は、教育、商業、政治そして地理や自然科学に関する種々の情報記事や論文で、政治ではアメリカの独立戦争に関わるものが多かった⁸⁵⁾。

『モスクワ報知の付録』のうちでとりわけ注目しておかなければならないのが『子どもの読本—心と理性のための』である。これは、1785年から1789年にかけて20冊出版され、ロシアで最初の子ども向け雑誌といわれているものである。ヴェ・ペリンスキーが「貧し

い子どもたちよ！我々は君たちよりはるかに幸せだった。我々はノヴィコフの『子どもの読本』を持っていたから』⁸⁶⁾と述べているように、19世紀前半までその与えた影響は大きかった。ノヴィコフは『子どものための読本』の出版についてこれまで、我が祖国の言語で子どもの読物としてふさわしいものが全く存在しなかった。……自分の祖国を愛している人々はみな、我々の多くの者たちがロシア語より、フランス語のほうをよく知っており、祖国のものと名づけられるもの一切にたいしてさまざまな偏見にとらわれてしまっている、というのを見て嘆き悲しんでいる⁸⁷⁾と書いている。『子どもの読本』は、最初の二年間(8冊まで)ノヴィコフが直接に編集にあたり、その後は作家エヌ・カラムジン(1766-1828)と詩人ヴェ・ペトロフ(1736-1799)が編集した。ノヴィコフの編集したのを見ると、『宇宙のしくみ』『太陽』『地球』『地震』『ライオン』『さる』『生命維持への動物の本能』『父と子の雪についての対話』『火についての対話』『鳥についての対話』など子どもの知的好奇心をみたそうとするもの、『村の生活について息子との文通』『農民の状態』『勤勉の大きな効用』『共同生活』『低い身分のものにみる心の広さ』『児童愛の手本』『親のまね』など道徳的性格の強いもの、の大きく二つに大別される。

IV

エカテリーナ二世は、プガチョフの乱後、国民に国家への隷属意識を植えつけること、つまり忠良なる臣民としての市民の形成に自らもとりかかった、エカテリーナはその方策のひとつとしてロシアに伝わる格言を利用した。彼女の命によって、1777年に『ロシアの格言』が出版された。これは問答形式で「至福」について説いたものであるが、例えば、ロシアに「平等」が存在しているかという問に、「存在している」なぜなら「すべての市民の平等は、すべての者が最初の定めに服従しているということに存しているからである」と各人がその身分に安住することを説き、またロシアに現存する「貧しさ」については、「人間は、何も所有していないことのために貧しいのではなく、労働していないことのために貧しいのである。何の知行地も有していない人はもちろん働いているが、彼は所得の有るものが働いていないかぎりにおいて、その分だけ有利に生活しているのである」といった説き方で、詭弁を弄したものとなっている⁸⁸⁾。エカテリーナは、「若者の中に神を恐れる心を吹き込み、彼らの心を賞讃に値する性格につくり上げ、そして彼らを確認たるかつ彼らの身分に相応した規則に慣らさなければならない」と書いている⁸⁹⁾。1782年には『精選ロシアの格言』が出版された。そこには「位あるものが先」「無いものを求めるな」「欲するままに生きるのではなく、神が命じるままに生きよ」「耕すのを怠けぬ者に幸がくる」「神は善なるものを助く」といった格言や諺が集められ、従順、勤勉の必要を説き、現実社会での不満を抑制させることに向けられている⁹⁰⁾。

ノヴィコフは、『雄蜂』誌以来しばしば格言や諺を用いて貴族を諷刺し、その反面で民衆の中で長年培われてきた生活の知恵や彼らの賢明さを示そうとしてきたが、エカテリーナがそれを民衆支配の手段に用いようとしたことに反発するかたちで、1784年に『ロシアの諺』を出版した。これは諺を使った16の物語から成っているが、「ツァーリに近づけば

死に近づく」「年をとっても浮気はなおらぬ」「手を束ねて機会を待つ」などはエカテリーナ自身を諷刺したもので、「人の物に手を出すな、自分の物を失うな」をもじった「自分の善を捨てて、他人の善を待つ」とか「学びてやまず」はフリーメーソンの神秘主義やセンチメンタリズムを諷刺したものであった⁹¹⁾。

エカテリーナは、「国民学校設立のための委員会」設置してまもなく、ヤンコヴィチに命じて、人間と市民についての教科書の作成を命じた。それが1783年に出版された『人間と市民について、エカテリーナ二世女王陛下の大いなる思し召しによる国民都市学校において精読すべき書』であって、国民学校の必読本とされた。これは「模範的従順の思想」で貫かれ、エカテリーナの教育理念を端的に反映したもので、「祖国の息子」となることが国民の務めであることが説かれている。「どんな身分にあっても幸福になることができる。ツァーリ、公侯、貴族といった家柄の良い人々だけが幸せな生活を送っていると考えがちである。しかしこれは正しくない。神の慈悲はいかなる人間も幸福から除くことはしない。市民（註. 都市の小さな商工業者を指す）、職人、農民（註. 自由農民を指す）、雇人（註. 自由労働者を指す）そして奴隷（註. 農奴を指す）も幸せな人間になることができる」なぜなら「どんな身分にもそれなりの労苦がともなうもの」であり「幸福は各人が彼に神命じられた職責を辛抱強く遂行すること」にあり「真の幸福は我々自身の内部にあるものである」従って「自分の身分や地位に満足している人々だけが、この世で幸せなのである」とする。ロシアに農奴が実在していることが「不平を引き起す」ものであってはならない、それは「主人と奴隷の分離は神自身が」定められたことで「主人にも召使いにも、自由人にも奴隷にも彼らの義務を命じているのが神の戒律」なのである。「国家の成員の全体の幸福があらゆる政治の目的」であり、それは政治が「しかるべき秩序と畏敬の中に」あって、そのために「臣民」は「祖国の息子」として協力しなければならない。「真の祖国の息子」は、国家に、つまり政体に、当局にそして法律に結びつけられなければならない、祖国への愛は、我々が畏敬と感謝を政府に現わすことに、法に服従することにある」のであって、「祖国の息子」として次の3つの義務を遂行しなければならない。「祖国の息子の第1の義務は、政府に関して何らの非難めいたことを語らないこと、……いわんやそのような行動をしないことである。それゆえに一切の扇動的言動……は祖国に対する犯罪であり、厳罰に値するものである」「祖国の息子の第2の義務は、服従である。各人は、服従が困難であると思われる場合にも、また他の約束事に従わなければならないと考えているような場合でさえも、服従する義務がある」「当局は、全体の幸福を最善にかつ本質的に知ることができかつ知らねばならない。それゆえに、統治者の炯眼と正義にたいして心の底から信服することが祖国の息子の第3の義務である」⁹²⁾

このようにエカテリーナは教育の目的として忠良なる「祖国の息子」を形成すること明確に宣言した。1786年の「国民学校令」では、「教育は、人間の理性を種々多様な知識によって啓発し、彼の魂を美しくする。つまり意志を善行に向かわせ、善なる生活に導き、そして結局、社会生活において人間にとって必要な判断力で彼を充たしてくれる」と教育の意義をうたいあげているが、それも「造物主とその聖なる掟についてのおよび陛下へのゆるぎなき忠誠の堅固なる戒律についての純粹かつ理性的認識」を培うことに眼目があり、

そこに「国家全体の安寧の支柱」を見ていたのであった⁹³⁾。

ノヴィコフは、『市民と人間の義務』の出版に合わせたかのように1783年から1年にわたって『モスクワ報告の付録』で教育論文をおよそ10篇書いている。ノヴィコフは、エカテリーナが忠良なる「祖国の息子」の形成を目的にしたのに対して、「子どもたちを幸せなそして有用なる市民に形成する」ことを目的に人間の自由と平等を主張した。彼の教育論文のうち、もっともまとまっているのが『子どもの教育と指導について、一般的に有用な知識の普及と全体の安寧のために』(1784)で丸1年間23回にわたって掲載されたものである。以下これをもとにノヴィコフの教育論を考察する。

ノヴィコフは、子どもを「幸せなそして有用なる市民」に形成するためには、三つの教育—「主として肉体に関する身体の教育と心の形成を目的とする精神の教育……そして教化、あるいは理性の形成に従事する分別の教育」—が「相互依存的な関係」をもって施されなければならないとする⁹⁴⁾。ここでは、「分別の教育」について詳しく見ていくことにするが、他の二つについて特徴的な点を触れておく。「身体の教育」は「健康で頑丈なからだ」をつくることを目的とするが、ノヴィコフは「遊び」を重視する。「遊び」は子どもの理性の強化と心の完成に導く補助的作用をもっており、「子どもの熟練は遊びによる」ものでなければならず、「楽しく五官で感知しうるものを用いて子どもの好奇心を惹き起す補助手段」を用いなければならない。とくに戸外でのスポーツ的な「遊び」がよい。それは「手や足を非常にしなやかにし、バランスのとれた身体をつくり、視覚をすばやく正確に把握することに慣らし、そしてついには身体全体にむだのない動きを与えてくれる」からであるとする⁹⁵⁾。「精神の教育」つまり道徳教育については、親や教師に「子どもたちに、身分、宗教、民族や外面的幸福の如何んを問わず、どんな人間にたいしても心からの愛と敬虔の念を抱くようにしてやりなさい……すべての人間を、卑しい身分の人も高貴な人も、兄弟として尊うことを彼らに教えなさい」⁹⁶⁾ということを結論にしている。

それでは「分別の教育」つまり「理性の形成」について検討していくことにする。ノヴィコフは、「理性」^{ラズーム}という語を、「自覚」^{ソズナニエ}として、一切の認識^{パズナニエ}の過程を包み込んだ概念として、また「思考」^{ムイスレニエ}の同意語として用いている。彼は、「子どもたちが真理の認識に到達する道にあって、彼らを一切の岐路に立たせないようにするとか道を違えた場合には連れ戻してやるということにだけ気を配る指導者ではなく、まわり道や迷路を自分で避けそして自分の目的に向って真っ直ぐに進んでいこうと努力することを教えてやる分別のあるそして熟練した指導者が彼らに必要である」と、知識の習得の過程において理性の力、つまり創造的思考力を訓練が目的であって、そのためには適切な指導がなされなければならないとした。その指導の方法は5つあり、それによって「子ども理性を正しく教育」することを求めた。

第一の方法は、「あなた方の子どもあるいは生徒の好奇心を損なわないようにすること」である。好奇心こそ理性的で賢明になる「強い起因となりすぐれた手段」である。好奇心は、子どもに固有のもので、大人にいろいろ質問したいという気持を起こさせるのであって、「子どもたちがすべてを知る必要がない」と考えて子どもの好奇心を損ってはならない。「子どもたちの疑問に答えるということ」は、不愛想に「そうだよ」あるいは「ちが

うよ」と答えることではなく、「彼らが知りたいと思っていることを彼らが実際に学びとったとなるように、またそれが彼らに満足も一緒にもたらしめてくれるようにしてやること」である。従ってこのような機会を「子どもたちの思考の訓練の場としてとらえ」さらにつぎつぎと子どもたちの好奇心を刺激して「疑問を起させ、彼らを彼らに未知なるものの探究者にしてしま」わなければならない。

第2の方法は、「あなたの子どもあるいは生徒に感覚を行使すること、つまり正しく感じとることを学ばせること」である。感覚が知識の源であり、理性が「感覚器官の知覚の材料を整理する独特の道案内」となる、つまり「我々の感覚の助けによって外的な物質によって我々の中につくり出される印象と、それから我々の心の中に生じる表象とは、あたかも我々の精神が精練する材料であり、そしてついにはあらゆる認識や人間の科学の基となる材料であるかのようである」。

ノヴィコフは、「観察」を重視して、「子どもたち自身が見たり聞いたり、感じたりすることができるようなことがらを、本を読むことや口頭で教えることによって、無理やり教えるてはならない。彼らに自然の美しさ、動植物界の神秘、多種多様な空中現象、降るような星空の壮麗さ、などを観察させ、心によく留めさせ、彼らの心の中にみちあふれている多数のまだぼんやりとしたままの表象を彼らが識別し整理するのを助けてやりなさい。しかし、これらを彼ら自身で確かめさせ、彼らに固有のやり方で感じとらせなさい、そしてそこから彼ら自身で得られた印象を、時機にそぐわない説明や彼らの興味を失わせるような説明によって、弱めることがあってはならない」と主張する。彼はまた、子どもたちの理解に合せて社会生活を観察させ、彼らと一緒に調べることが必要であるとして、「彼らを農民の家と穀倉に、画工や手仕事に従事する人たちの作業場へ連れていきなさい、そこで彼らに、どれほど多くの土地の富がつくり出され、そしてそれらがどれほど人間に必要なものや役立つものであるかを示してやりなさい。彼らにこれらの仕事に用いられている主な道具について説明してやるとともにそれらに従事している人々にたいして然るべく尊敬の念を抱かせるようにし」なければならない、そしてこれらのことが「想像と思考の力として、有益なそして楽しい考察の非常に豊かな源として、彼らの理性や思慮を用いてくれる」ことを強調する。また「注意」を重視する。「子どもたちにいつも注意を身につけるようにさせなさい。注意は正しく堅固な認識の母である」という。このためには、子どもたちが目移りの次に次から次に観察するのではなく、あるものをいろいろな側面から、全体的に大ざっぱにだけでなく部分もじっくり観察させなければならない。しかし子どもの注意力の訓練は、子どもの年齢的特徴を考慮しなければならない。「あなたがたは、教育の最初の数年間彼らにひとつのことにあまりにも長く留まっていることを強いて彼らの注意を疲れさせてはならない。あなたがたは、深く注意を払うことがいかに大切かについて、彼らに少しずつ感覚的に請け合ってやるのが好ましい」のである。

第3の方法は、「たとえどんなに些細なことでも、子どもたちに誤ったあるいはあまり正確でない観念をいくつも与えてしまうことがないように用心しなさい。彼らが多くのことを誤って心に描くなら、彼らにまったく何も知らせてやらない方がはるかにましである。彼らの疑問にたいしてどっちつかずのまた不正確な答えを与えるよりも、それらにたいし

て彼らに答えるのを完全にやめてしまうほうがはるかにましである」ということである。親や教師はあいまいな答をしたために「子どもたちがただ黙ってしまったことにたいして、彼らは後になれば自分でこのことをもっとよくわかるようになるだろうと自分を慰めている」と批判し、「こうした期待はあてにならないのである。最初の印象がいつまでも持ち続けられ、それらが誤解へと導いてしまうということが本当にありうるのである」と警告する。

第4の方法は、「子どもたちに、彼らの年齢からみて、あるいは他の予測される不都合からみて、これ以上知識を理解できないというようなものは何も教えるはならないということである。「子どもたちの記憶を記号や単語で重荷を負わせないこと」「他のことを意味する知識にまで彼らをつれていってしまわないこと」「彼らがそれについてまったく考えもつかないとか、別のことを考えてしまうといった言葉を用いることを許さないこと」が肝要で、言葉を適時に使いこなすことが指導者の能力を計るバロメーターとなる、「言葉はあなたの心の豊かさのしるし」である。

第5の方法は、「彼らの認識をふやしてやることや広げてやることだけでなく、それをしっかり根のはった確かなものにしてやるように努めること」である。子どもたちに「多くのことについて浅い知識を持たせること」に励むのは、「自分の生徒を親の前で自慢し、賞讃を得ること」だけしか考えない「思慮の足りない教師」と同じであると批判する。

以上が5つの方法であるが、ノヴィコフは、「子どもたちは、実際の側面からすべてを見ることを学び、自分の知識を自分の行為に利用しようとするときにしっかり考えることを学ぶのである」ことを強調する⁹⁷⁾。そして彼は「我々の本性には、我々の意志が、大抵の場合、認識と区別の命令に従っている。我々は善を心に描くことだけを願っている」ということを結論にしている⁹⁸⁾。

ノヴィコフは、子どもを「愛撫された奴隷に教育する」のではなく、「自由にそして高潔に思考する人間、つまり自分自身を評価することができ、なによりも真理を愛し、自分の任務を果たすとき、あるいは他人の幸せのために真理を述べることを恐れない人間」に教育しなければならないとする⁹⁹⁾。これが彼の「幸せで有用なる市民」であり、身体、心、頭のバランスのとれた分別のある人間である。

ノヴィコフは、「彼ら（註：貴族階層）が庶民とか卑しい人間と呼んでいる人々の方がはるかに大きな功績を成し、社会の最も重要で最要な存在であり、それゆえに彼らよりもはるかに大きな名誉と尊敬に値する」¹⁰⁰⁾と当時の誤った価値観を正すことを求め、教育にその可能性を見い出そうとしたのであった。そしてそれは19世紀以降にも見られるインテリゲンツィアの一つの典型であった。

注

- 1) Педагогический Словарь Том 2 Москва
- 2) М. Тихомиров История Философии в СССР Том 1 Москва 1968 стр. 297
- 3) В. Смигельский Кантемир о воспитании журн. «Советская Педагогика» 1944 No. 7 стр. 54
- 4) С. Рождественский Очерки по истории системе Народного просвещения в XVIII XIX

- вв. Том 2 стр. 316
- 5) エカテリーナⅡ世は、ドイツのアルハト・ツェルプスト公の娘で、ピョートル皇太子(=Ⅲ世)に嫁いたが、女帝エリザヴェータの気紛れな性格と精薄気味で粗暴な夫との不幸な生活の下で孤独の中に過ごし読書に多くの時間を費やした。ヴェ・クリュチュフスキーは、「不幸と孤独が彼女の教師であった。迫害は、抵抗の感情と啓蒙主義的傾向の哲学の自由主義的思想への共感を育てた。」と書いている。
 - 6) ヴェッコイは、『両性の若者の教育についての一般的制度』を、ミレルは、『公衆学校の制度の制度のための若干の考察』を提出した。またモスクワ大学教授ディリテイも計画案を出し、それをもとに「一般的教育改革草案作成の特別委員会」が構成され、1766年に『ギムナジヤ、あるいは国営学校の一般的計画』案を政府に提出した。しかし認可されなかった。
 - 7) 全国から、政府諸機関、貴族階層、都市住民、国有地自由農民やコサックなどそれぞれの選出代議員456名が召集された。
 - 8) 20章 655条から成るが、その大半がモンテスキューの『法の精神』とベッカリヤの『罪と罰』からの借用で、独創性に乏しいといわれる。
 - 9) マーク・スローニム 池田健太郎訳 ロシア文学史 新潮社 1976 42頁
 - 10) Б. Каллашь Что сделала Екатерина II для русского народного просвещения журн. «Вестник Воспитания» 1896 No. 8 стр. 129
 - 11) Там же стр. 130
 - 12) Там же стр. 142
 - 13) ゴーリキー 山村房次訳 ロシア文学史 五月書房 1952 62頁
 - 14) クリュチュフスキーは、「自分の『訓令』によってエカテリーナは、ロシアにとって目新しいかっただけでなく西欧の政治生活でも完全に消化されていなかった多くの理念を、すこぶる制限された形ではあったが、ロシアに取り入れた。ただしその理念を具体化すること、それによってロシアの国家制度を再建することを急がなかった。」と指摘している。
 - 15) В. О. Крючьевский 八重樫僑任訳 ロシア史講話5 恒文社 1983 212頁
 - 16) ニコライ・イヴァノヴィチ・ノヴィコフは、中流貴族の家に生まれ、モスクワ大学附属ギムナジヤに入学した(1755)が、卒業直前に退学し(1760)、イズマイオロスキー近衛連隊に勤務した。新法典編纂委員会の召集とともにその書記官に任じられた。
 - 17) Там же Что сделала Екатерина II... стр. 151
 - 18) История дошкольной педагогики в России Хрестоматия Москва 1976 стр. 38
 - 19) Там же Что сделала Екатерина II... стр. 155
 - 20) Под ред. Н. Константинов Очерки по истории начального образования в России Москва 1953 стр. 55
 - 21) Там же Что сделала Екатерина II... стр. 152
 - 22) И. Мартынов Книгоиздатель Николай Новиков Москва 1981 стр. 13
 - 23) Под ред. А. Западова История Русской журналистики XVIII-XIX вв. Москва 1963
 - 24) Там же стр. 44
 - 25) Там же стр. 50
 - 26) Там же стр. 51
 - 27) Г. Макогониченко Николай Новиков и русское просвещение XVIII века Москва 1951 ств. 152~153
 - 28) Ред В. Кулешова русская литературная критика XVIII века москва 1978 стр. 152~153
 - 29) Там же История Русской журналистики... стр. 52
 - 30) Там же Русская литературная критика... стр. 153
 - 31) 『精霊の郵便局』のエフ・エミンは、『一切合切』が「公平な事柄」を「不道德なもの」と呼んでいることを非難し、こうしたやり方は「永久に何かが覆い隠されたままではいけないことを知らなさい。そのものはいつの日にかあなたの栄光の政治をも食いつくしてしまうのです。

あなたの政治の白粉と紅がはがれてしまったとき、あなたがたの目論みの事実すべてが明らかになってしまいます。」と批判した。

- 32) Там же История Русской журналистики… стр. 43
- 33) Там же Николай Новиков и русское просвещение… стр. 167
- 34) Там же
- 35) Там же
- 36) Под ред. Бескровного Хрестоматия по историй СССР XVIII в. москва 1963 стр. 604
「ベズラススードは、農民たちは人間ではなくて農民であるという見解に病んでいた。彼にとって農民たちは、農奴で、彼の奴隷であるということである。…彼はいつも思っている。私は主人で、彼らは奴隷である。従って彼らはどんな困難をも堪え忍んで、昼も夜も働き、決められた年貢をきちんと納めて私の意志を満足させるためにこの世に生まれているのだ」
- 37) Там же стр. 607~608
- 38) 実は、「父親」のような「善良なる地主」は、『雄蜂』誌の「新年に新しい幸せ」(1770)に見られ、「私は、あなたがたの地主があなたがたの父親であって、あなたがたが彼の子供であってほしいと願っている」と書いている。
- 39) Там же Хрестоматия по историй СССР… стр. 612
- 40) Там же Н. Новиков и русское просвещение… стр. 198
- 41) Там же
- 42) Там же История русской журналистики… стр. 67
- 43) Там же
- 44) Там же Что сделала Екатерина II… стр. 143
- 45) 前掲書 ロシア史講話5 26頁
- 46) 同前 36頁
- 47) Там же История журналистики… стр. 69~70
- 48) エカテリーナが1770年に外国に自分の啓蒙君主ぶりを誇示するためにロシア語、ラテン語、ドイツ語、フランス語で出版させた。ロシアでは、上記のように一般には公開されなかった。
- 49) Там же Николай Новиков и русское просвещение… стр. 302
- 50) 一冊の定価はベテルブルクで4.5ルーブル、地方で5ルーブルであったが、講読予約者の多くが一冊につき5ルーブルから25ルーブルで買い上げてくれた。
- 51) В. Якушнии Заботы русского общества о недостаточных студентах в XVIII вех стр. 80~87参照。
- 52) Там же Николай Новиков и русское просвещение… стр. 314~360
- 53) Николай・ヴェルジャエフ 田口貞夫訳 ロシア思想史 ペリかん社 昭和49 22頁
- 54) 赤間剛 フリーメーソンの秘密 三一書房 1983 49頁
- 55) Там же Книгоиздатель Николай Новиков… стр. 35
- 56) Там же Николай Новиков и русское просвещение… стр. 299
- 57) Там же стр. 310
- 58) そこでは、人間は「神の創造物であり、神の支配の臣民」であり、「忠良な奴隷の如く隷従すること」が人間の義務であることが繰り返された。「我々は、キリスト教徒であるがゆえにキリストの奴隷である。それゆえ、支配者が奴隷に命じたことのすべての義務を果たさねばならぬように、我々も我々の義務を最大限に遂行しなければならない」とした。そして「自分自身を認識した人間に、神意によって彼が占めるにふさわしい官位や身分をかなえさせてくれる」のであり、「どんな役割を演じるべきかは、我々に任されているのではなく、神意に依っている」のであるとした。
- 59) Там же Николаи Новиков и русское просвещение… стр. 316~322
- 60) Там же стр. 322
- 61) Там же стр. 326
- 62) Там же стр. 356

- 63) Там же
- 64) Н. Трушин Общественно-педагогическая деятельность Н. И. Новикова журн. «Советская Педагогика» 1956 No. 6 стр. 77
- 65) Там же Николай Новиков и русское просвещение... стр. 508
- 66) Там же стр. 509
- 67) Там же стр. 460
- 68) Под ред. М. Шабаева Очерки истории школы и педагогической мысли народов СССР XVIII в. стр. 168
- 69) Там же Общественно-педагогическая деятельность... стр. 71
- 70) Там же
- 71) Там же стр. 73
- 72) Там же
- 73) Там же Николай Новиков и русское просвещение... стр. 303
- 74) Там же стр. 302
- 75) Там же Общественно-педагогическая деятельность... стр. 73
- 76) Там же
- 77) Там же Очерки истории школы и... стр. 146
- 78) 1775年の県行政改革で慈善, 保育, 教育はすべて各県に設置される慈恵院の管理下に置かれることになった。
- 79) 当時は寄宿施設を有する学校という意味で, ノヴィコフの学校や外国人経営の女学校の大半がそうであり, 学校を一般に指していた。
- 80) Там же Очерки истории школы и... стр. 148
- 81) Там же стр. 91
- 82) Там же Общественно-педагогическая деятельность... стр. 77
- 83) Там же стр. 76
- 84) Там же стр. 77
- 85) Там же Николай Новиков и русское просвещение... стр. 490
- 86) И. Чувашев Новиков Н. И. журн. «Советская Педагогика» 1944 No. 5—6 стр. 35
- 87) Под ред. Г. Макогониченко Н. И. Новиков и общественно-литературное движение его времени Ленинград 1976 стр. 112
- 88) Там же Николай Новиков и русское просвещение... стр. 279
- 89) Там же стр. 280
- 90) Там же стр. 479
- 91) Там же стр. 466~467
- 92) Там же Хрестоматия по истории СССР... стр. 582~584
- 93) Под ред. Ш. Ганелина Хрестоматия по истории школы по педагогике в России Москва 1974 стр. 72
- 94) Там же стр. 80
- 95) Там же
- 96) Под ред. М. Соколова Из истории русской психологии Москва 1961 стр. 99
- 97) Там же Новиков Н. И. стр. 34
- 98) Там же Хрестоматия истории школы... стр. 81~87
- 99) Я. Роткович О педагогических взглядах Н. И. Новикова журн. «Советская Педагогика» 1953 No. 10 стр. 92
- 100) Там же Из истории русской психологии... стр. 87